丹波新地域ビジョン検討委員会「絆・安全安心分科会」　記録

１　**開催日時**　　令和３年３月１６日（火）　１８：００～２０：００

２　**場　　所**　　柏原総合庁舎　柏原職員福利センター　１階会議室

３　**出 席 者**

委　員（五十音順）
上甫木委員、岸委員、清水（徳）委員、瀧山委員、竹見委員、
谷水委員、中川委員、

※欠席委員：土性委員

事務局
丹波県民局：柳瀬県民交流室次長、西原班長、竹村

４　**内　　容**

（１）開会
・柳瀬次長あいさつ
（２）報告事項
・スケジュールと方向性
協議事項
・リーダー決定→自薦他薦なし。事務局から上甫木委員へお願いし、リーダー就任承諾
・意見書を元に意見交換

５　**意　　見**

〔委員〕
この分科会では、「絆」と「安全安心」の分野について深めていく必要があるようなので、それぞれ項目ごとに深掘りをしていきたいと思う。早速だが、高齢化・高齢者の項目から順に皆さんのご意見を頂きたい。
30年後の目指すべき姿を中心に議論を進めたい。それを実現するための提案の部分を含めてのご発言でも構わない。

＜絆＞

<u>高齢化・高齢者</u>
〔委員〕
社会の高齢化は避けられない。かといって、高齢者は助けられる存在ばかりであるかという

と、そういうわけではない。自分でできることを高齢者にしてもらえるような仕組みを考えていかないとだめだと思う。AI 機器等に関しても、丁寧にその扱い方を教える機会があれば、使いこなせる人が多い気がする。葉っぱビジネスで有名な徳島県上勝町では、80代のおばあちゃんがタブレットを使いこなしている。適応力の高い人を支援していくことも大事になってくる。

〔委員〕
丹波市の人口ビジョンの中でも、人口が減るということをはっきりと謳っている。今後大事な視点としては、人口構造の問題と考える。高齢者であっても生き生きと暮らして自分なりの役割を果たす、活躍していただくというのが大きなこと。支える、支えられるというのではなく、ひとりひとりの役割を果たすということが大事。
これは移住にも言えることで、セカンドライフとして丹波で暮らすというよりも、丹波で活躍していただける方に移住していただくことが大事ではないか。
丹波市のまちづくりビジョンでは、2035年頃のまちの姿を描いたものになっている。今回のビジョンで考えている2050年とは差があるが、参考にしていただきながら、付け加える部分があれば入れていただきたい。

〔委員〕
高齢化は少子化ということでもある。女性や子どもが少ないから高齢化につながる。高齢者に視点をあてたビジョンをつくるのであれば「高齢化」ということばは消さないといけない。また、「高齢化」ということばを入れるなら少子化にも触れる必要があると思う。

〔委員〕
高齢者だけが項目として出てくると、特定の層のような印象を受ける。「弱者とされる対象者」という視点で考えた方が分かりやすいのではないかと思う。項目出しするのであれば、障害者など、他の層も出す必要がある。

〔委員〕
30年後、子どもや若者がいないことに危機感を感じる。ここでは高齢者に視点をあてておいてもよいと思う。他のところで少子化対策について書いてあればよい。30年先を考えるのであれば、子どもをたくさん産んでもらえるようなビジョンはあってほしい。

〔委員〕
次代の柱のところの冒頭で少子高齢化については触れられているので、少子化はそこに入っているという認識をしていた。
ただし、それぞれの項目を完全に切り離して議論することは難しいので、致し方ない部分はある。絆の柱の中で、どこまで重点をおいて議論するかという話だと思う。

〔委員〕
ここでは高齢者という問題で議論しておいて、人口構造が移り変わるという問題は色々なところに影響するので、全体の中で議論することが必要だという問題提起としておく。

〔委員〕
高齢者が活躍する地域というのは大事だが、全ての高齢者がそうなるとは限らない。全ての高齢者に何らかのサポートの手が行き届いている地域を目指したい。

〔委員〕
先ほどの話にもあったが、1つの特定の層だけどうするという考え方ではだめ。インクルージョンの考え方が必要。高齢者に限った話ではなく、子ども、女性、障害者など、もっと言えば社会的弱者もそれ以外の人も、というところだと思う。
少子高齢化社会の中で、絆を大切に生きていくためには、インクルージョンが必要、という議論の持って行き方はできるのではないか。

〔委員〕
絆という柱の枠組みをどうするかという話だが、今までのところで説明ができるだろうか。

〔委員〕
それぞれのテーマで皆さんが定義をどのように置いているかによって違ってくる。見方によって、30年後の目指すべき姿や提案の部分も変わる。

〔委員〕
高齢者だけの絆というよりも、今後ますます、多世代や地域の中での関わりが求められる。若干その部分が見えにくい。何の絆なのかが説明できれば分かりやすい。

〔委員〕
柱自体を考え直さないといけないような話にもなってくると思う。

<u>多世代・家族</u>
〔委員〕
30年後の目指すべき姿はいずれも末尾が「～地域」でまとめてある。絆というキーワードを中心とした丹波地域、として考えるべきものか。

〔委員〕
今の資料では、多世代・家族の30年後の目指すべき姿は、「多世代・家族の姿」ではなく、「地域の姿」の話となっている。

〔委員〕
項目ごとの30年後の目指すべき姿の上位に位置づけられる絆の分野の将来像が共有できていれば、議論しやすいと感じる。

〔事務局〕
今の時点では、「次代」以外の5つの柱については、前回のビジョンを引き継いでいる形となっている。

〔委員〕
　前回のビジョンでは、絆のたんばをどのように達成するかの取組みの方向が4項目（①地域コミュニティの再生②地域ぐるみでの子育ての推進③高齢者が安心して暮らせる地域づくり④高齢者が活躍できる地域づくり）書いてある。
　今回は取組みの方向のキーワードということで、家族、多世代、高齢者などというところが単語で挙がっているが、その捉え方までは書かれていないので混乱が生じている部分がある。
　絆のたんばを目指すためにはどういうことを進めていけばよいのか、ということになるが、そういう意味では、今回もあまり変わらない話であるようには感じる。
　事務局があえて項目を単語で書いているのもそのようなことだろうと思う。方向性についてはまだ共有されていない状態なので、自由に発言していただいてよい。

〔委員〕
　提案のところで、「丹波から外の地域に出て行くことを解消する」とある。気持ちは分かるが表現を変えて欲しい。

〔委員〕
　そういうことで言えば、提案の表現は大きく変わる前提と考えてよいか。他にも、初めて見た人がびっくりするだろうという表現はたくさんある。

〔委員〕
　表現については今後変わるものと考えてよい。今日は基本的な枠組みの議論ができればよい。

〔委員〕
　若い人が無理をせずに自然と帰れるという選択肢があるのが大事。丹波から出て行かないようにするのではなく、出て行ったとしても帰ってきやすい。色々な世代の人、背景のある人が暮らしやすいというまち。それを実現しているまちというのが、30年後に目指すべき姿だろうと思う。
　前のビジョンを踏まえてこのような活動をしてきた結果、ここがよくなった、というような内容も入れられるとよい。

<u>つながり・個人の尊重</u>
〔委員〕
　人づきあいしやすく暮らしやすい地域や、誰もが自分らしく生きられる地域というのを実現するためには、それを裏付ける仕組みが必要。コミュニティと言っても、地縁、テーマ型、職場、母親、経営者など様々で、自由に複数のコミュニティを持とうと思ったら、24時間では足りない。特に地縁のところは、少子高齢化の中で重荷になってくると想像する。働き方やコミュニティのあり方を変えることも必要になってくる。若者も含めた多くの世代が地域づくりに参画しやすくするため、どのようにシステムを変えていくかに取組むことも重要。

〔委員〕
　丹波の女性は自己肯定感がすごく低い。家で決めたことや父親の意思決定が優先され

る。若い女性の地位が低く見られているところがある。個人の尊重というときに、丹波特有の、若い女性の暮らしにくさというところを何とかしたい。若い女性の自己肯定感を高めるとか、意見を尊重するというような内容を入れてほしい。

〔委員〕
話を聞いていて、安全・安心の柱にある男女共同参画の項目は、絆の柱に入れたいと感じた。そういうものも含めての絆ではないかと思う。ユニバーサルの内容も同様。

〔委員〕
絆でいうならば、若い人が社会のしがらみに縛られない地域、というような感じになるか。

〔委員〕
そう考えると、女性は縛られているところがある。これまでの固まった考え方が壁となって、つながりができにくくなっているのが問題。その壁をなくしていくということが、目指すべきところではないか。

〔委員〕
個人の尊重は、色々な側面から守られないといけない。

〔委員〕
個人の尊重というところを深掘りしてしまうと、人権の話になってしまう。その議論になれば、先ほどの話のようにどちらの柱がよいか、という話になってくる気がする。

〔委員〕
方向付けについては、単語だけではなかなか伝わらない。今後まとめる際には、イメージとしては新聞の見出し程度には意味がわかるように記述した方がよい。

<u>地域の生活文化</u>
〔委員〕
世代間により認識がかなり違うというのが一般的な話で、若い人がその良さを分かってもらえていないことが多い。理解してもらっていないのか、伝える側に問題があるのか。

〔委員〕
若者の参加がなかなかないような行事の中に、そのような部分が盛り込まれていたりするのではないかと感じている。田舎の人付き合いと結びついているところもあるので、難しい部分もある。伝えていくべきものは何かということを地域の中でしっかりと捉えて、家族ぐるみで参加するような仕組みをとってみたり、若者が興味を示すような PR の仕方をとってみたり、地域にはこんな宝があるということを知らせるような形をとる、というのがよいと考えている。

〔委員〕
地域固有の価値や文化が残る地域、とあるが、ただ残っていても仕方がない。そういう文化に参加できるとか、楽しめるという経験ができれば、祭りの場や地域に子どもたちは戻ってくる。そのような地域になってほしい。

〔委員〕
全体を通じて、地域というものが、極端に言えば自治会のイメージと結びついている印象を持ってしまう。丹波地域はよく、地域のつながりがあってまちづくりの参画も県内で非常に多いといわれることがあるが、裏返せば自治会との結びつきが強いとも考えられる。一方で、そのようなコミュニティが守られるかというところは疑問。最近は集落葬も減っている。もちろんコロナの影響もあるが、これを機に煩わしいことをしないでおきたいという思いもどこかにあるのではないか。地域といえば、絆というよりもしがらみの方が強くなってしまう可能性がある。新しいコミュニティのあり方を考えるべきかもしれない。

＜安全・安心＞

災害・防災
〔委員〕
ハード面の充実という表現があるが、災害復興の仕事に関わっていた経験から感じるのは、この部分こそ絆なのではないかと感じる。災害発生前にどういうことをしていたら復興がスムーズにいけるか、を考えるのがセオリー。そのためには、災害から学んだことをまちづくりに反映させたり、住民ができることを増やしておく。もちろんその中にハード整備も含まれるが、それらの蓄積の中で災害に備える、という考え方になってくると思う。ハード面をいうところに焦点をあてる表現は、少し危ういと思う。

〔委員〕
防災から減災へ。ある程度災害は起きるのが前提で考えて、それをどう食い止めてどう復興していくか、という仕組みになっている。ハード面が表に出すぎると、目指すべき姿が変わってくる。

〔委員〕
提案の部分で、公助をしっかりと確立させる、ということを書いたが、情報提供の伝達がしっかりした上での、自助や共助というところにつながっていくという意味合いで書いた。ハード面というものとは異なる。

〔委員〕
そもそも山が荒れている。お金にならない資材が増えて、土砂崩れの原因になる。資源として活用できるように林業を生業として育成しながら、防災も考えていくというのが本来の姿ではないか。

〔委員〕
南海トラフ地震が起こることを想定すると、避難場所の受け皿としての防災の視点を加えるとガラッと変わる。丹波地域は京阪神地区の中でもリスクが少ない地域。

〔委員〕
京都沿いや小野市のあたりにも活断層はあり、そこが連動して動けば大きな地震が起こる可能性もある。丹波地域は決して地震とは無縁ではない。

〔委員〕
リスクが少ないからこそ、やや弱めに書かれている感じがする。一般的な防災・減災だけではなく、リスクが低い地域でも力を入れていることを PR できれば、防災に強い地域という魅力づけにつなげるということもできる。

〔委員〕
ハード面のところにはお金が出ているが、被災した後の支援に目がいっていない。災害による直接死だけでなく災害関連死も多い。被災後をどうするかも盛り込まないといけない。やむなく被災してしまっても、尊厳を持って支援されるべき。

〔委員〕
災害協定の受け入れができる地域という話があってもプラスになると感じる。
災害・防災の意味をどう位置づけるかを考えたとき、災害が少ないということで市民の危機感が低い可能性もある。最近だと、栃木県の足利市で山火事があった。原発の問題等も含め人災の面もあるかもしれないが、市民の皆さんへの啓発も必要。

〔委員〕
安全・安心をどこまでの範囲で捉えるか。一般的には防災になるが、交通防犯、食の安全、医療福祉。共助の支え合いという意味でのこころの安全など、色々ある。どこまで出していくのかはこれからの検討課題。そうなると、ユニバーサルというのは安全・安心の柱ではないという気がする。

<u>安全な食</u>
〔委員〕
生産者側の責任という視点から見ると、安全な食というのは安全・安心の分野ではなく、農業の分野で生産者側が意識していく、というところを目指すべきではないかと感じる。

〔委員〕
「県民の意識・ニーズ」のところで書かれている、給食や学校の指導方法についての表現は言い過ぎではないか。ファーストフードやコンビニエンスストアの記述も、家族構成や収入によって変わる。当事者が読んだときにびっくりするし、ここに書くのは無理がある内容。根拠や裏付けが必要。

〔委員〕
偏った内容であるというのは同感。きちんとした正しい情報、調査をもとに挙げてほしい。

<u>ユニバーサル</u>
〔委員〕
ダイバーシティ社会とはどういうことか。

〔事務局〕
端的に言うと、多様性のある社会ということ。

〔委員〕
ユニバーサル（外国人）となっているのはどういう風に考えればよいか。

〔事務局〕
ユニバーサルの分野での意見聴取の内容が、外国人の内容にまとまってしまった。社会福祉協議会などにもヒアリングにいったが、障害者などのご意見が頂けていない。外国人以外にも広げた内容にしたいと考えている。

〔委員〕
30年後の丹波地域を考えたとき、外国人ならではの困ることや課題は、もちろん言葉や文化の違いはあるが、それ以外の課題はそんなにないのではいかと思う。住みやすい地域という意味では、高齢者や女性といった、しがらみの中で生きる立場にある人との共通項はすごく多い。
その意味で、「ユニバーサル」とし外国人のみを項目出ししないのはそういうことだろうと思う。ただ、弱者という形でまとめるのは、表現として良くないとは思う。「現在の社会の現状からすると配慮の必要な人」などの表現になるか。

〔委員〕
自分と違う立場の人を理解しようとすると、そういう人とどれだけ関わって出会えるかで変わる。なかなか日常生活で出会う機会がない中で、誰もが自然に支援の手を差し伸べられるような行動ができる地域になるために、理解を深められる機会をつくることができたらよいと思う。

〔委員〕
今の世の中、ダイバーシティでなく、インクルージョンという考え方になっている。ダイバーシティは「違いを認める」というようなものだが、インクルージョンは「違いはあって当たり前で、全てを含んだ形で社会が成り立っている」というようなもの。

〔委員〕
インクルージョンは、大事なキーワードとして是非入れていってはどうか。

<u>男女共同参画</u>
〔委員〕
意識しなくても女性が参画できるようになるのが理想。今の意識を変えないとどうにもならない。女性比率が何％というように数値だけを追っていても意味が無い。女性にはどれだけのサポートが必要かといったことがわかったうえで、体制を整えていくことが大事。

〔委員〕
提案のところにある、「男が台所に立つなという親をなくす」ということに関して、言葉自体をふさいでも解決・前進しないというのはその通り。ただ、これは男女共同参画というよりも世代間ギャップのようなところもある。表現を変えるよう検討してほしい。
女性が逃げている部分も否定はできない。チャンスがあっても、家事の時間がとられる、責

任ばかりが重くなるといったこともあり、引き受けない現状がどうしてもある。こうしてもらいたい、というばかりでなく、自分から前に出る姿勢も大事。そのような内容も入れてもらいたい。

〔委員〕
主語に男性、女性と書かなくてもよく、意識しなくてもよいのでは。男性も女性もというところが趣旨だと思う。変に女性登用比率など意識してしまうことがよいのかどうか、ということは感じる部分ではある。

〔委員〕
現状では、女性が出にくいしがらみがたくさんある。表現を変えることでその内容が無くなってしまってはいけない。そこには言及すべきなので、難しいところ。同じ目指すところに向かうにしても、男性と女性では必要なことは異なる。同じ山を登っているようで全然違う。あえて書かなくてもよいというのも賛成ではあるが、どう意識を変えるかという問題。

〔委員〕
30年後の到達点をどこに求めるか。

<u>弱者とされる対象者</u>
〔委員〕
それぞれが尊重する、というのが一番大事。それぞれが尊重しあってこその地域。

〔委員〕
LGBT の問題は男女共同参画に入れるのか、それとも先ほどのユニバーサルの所に入れるのか。くくりの問題だが、個人的にはユニバーサルの所にいれるべきだとは思う。

〔委員〕
性に関わらずというのであれば、ユニバーサルの所がよいと感じる。

〔委員〕
男女共同参画ということば自体が、そもそも男女しか想定していないのが問題。

〔委員〕
場合によっては、全て含めてユニバーサルのとこにいれてもよいのでは。
その流れでいくと、弱者とされる対象者についても、ユニバーサルのところかもしれない。

〔委員〕
「県民の意識・ニーズ」の最後のところ、「昔からの慣習が根強く、女性が暮らしやすい地域とはいえない」というくくりで終わってしまうと、次の展開がない。「丹波地域の意識としてこういうものがある、だからこういう社会にしていかないといけない」というようにすると、目指すべき姿が見えてくる。
また、人権的な視点を踏まえたうえでの書きぶりも必要。今はこのメンバーだからこそ自由な意見が言えているが、人それぞれでこの表現がよいのか、という部分はあると思う。

〔委員〕
　昔からの慣習も踏まえながら、丹波らしい、これからの姿を描けるようにしたい。

〔委員〕
　ダイバーシティ社会のところで、文章の意味が重複している感じもするが、問題はないか。

〔委員〕
　ダイバーシティ社会という言葉自体、報道などでも使われる和製英語なので、問題は無いと考える。ただし、多くの人に意味が通じるかどうかというところはまた別の問題。

６　閉　　会